

## 大学生からのメッセージ

### 『完璧だなんて言わない』—オアシスという生き方—

東京大学農学部 2年 上野元輝

昨年(2025年)、世界は一つの「帰還」に熱狂した。ギャラガー兄弟による伝説のロックバンド、オアシスの再結成である。スタジアムを揺らす熱狂が証明したのは、僕たちが求めていたのがAIの最適解ではなく、マンチェスターの労働者階級出身の兄弟が鳴らす、泥臭い「人間賛歌」だったという事実だ。今回は僕が一番好きなロックバンド、オアシスについて書いていく。僕がオアシスに惹かれるのは、彼らの音楽的な素晴らしさはもちろんのこと、その「不完全さを肯定する生き方」そのものに、強く憧れているからだ。

オアシスの魅力は、「ノエル」と「リアム」という、水と油のように混じり合わない兄弟の個性が衝突する点にある。兄ノエルは「理性」だ。皮肉な視点で世界を捉え、普遍的で美しいメロディを構築する天才。対して弟リアムは「本能」だ。後ろで手を組み、マイクを睨みつける立ち姿だけで数万人を支配する。彼にあるのは理論ではなく、衝動的な声と、根拠のない自信だけだ。

この危うい均衡、そして彼らの関係性の真実が最も濃密に刻まれているのが、僕が人生で最も愛する楽曲である『Acquiesce』だ。本来はシングルのB面曲でありながら、ファンの間で絶対的な人気を誇る。AメロとBメロを歌うのは弟リアムだ。気だるく、挑発的で、ザラついた声が「何が俺を生かしているのか分からない」と吐き捨てる。しかし、サビに入った瞬間、世界が一変する。ボーカルが兄ノエルへとスイッチするのだ。リアムの低い声から一転、ノエルの高く澄んだ声が響き渡り、彼は高らかにこう歌う。「Because we need each other / We believe in one another (なぜなら俺たちにはお互いが必要で、お互いを信じているから)」普段はメディアを通じて罵り合い、決して素直になれない兄弟が、音楽という場所でのみ、魂の深い部分で握手をしている。リアムの暴走をノエルが受け止め、ノエルの孤独をリアムが代弁する。矛盾を抱えたまま、それでも「お互いが必要だ」と認め合うこの4分間、これほど不器用で、これほど純粋な信頼の形が他にあるだろうか。

彼らは決して品行方正ではない。喧嘩もするし、ビッグマウスも叩く。だが、その「人間臭い弱さ」を隠さず、むしろ武器にして世界と対峙してきた。その姿勢は、世界的なアンセム『Wonderwall』に見られる「脆さ」にも通じているし、何より『Little by Little』で歌われる哲学に集約されている。ノエルが歌うこの曲には、僕の人生の指針とも言える一節がある。“We don't claim to be perfect but we're free” (完璧だなんて主張しない。だけど、俺たちは自由だ)この言葉こそ、オアシスの生き様そのものではないだろうか。失敗してもいい、少しずつ(Little by Little)でいい。現代社会は僕たちに「欠点のない正解」を求めるが、彼らは「不完全なままで胸を張れ」と背中を叩いてくれる。

僕は、彼らのように生きたいと思う。気に入らない時には反抗的や舐めた態度でありながらも自分の弱さや矛盾を認め、それでも「俺の人生は最高だ」と笑い飛ばす強さ。『Acquiesce』で描かれた絆のように、不器用でも誰かと信じ合い、『Little by Little』のように泥臭く進んでいく。彼らの音楽は、僕にとって単なる娯楽ではない。この息苦しい時代を生き抜くための、最強の「肯定」なのだ。

是非、オアシスを聴いてみてください！！

## 行こうよ！水土里の旅！

### □ 宮古用水（沖縄県宮古島市）



かつて『干ばつとの闘い』だった宮古島の農業を劇的に変えたのが、この宮古用水プロジェクトです。

「サンゴ礁が産んだ『天然の貯水槽』を活かす知恵」 宮古島は浸透性の高い琉球石灰岩に覆われており、降った雨の多くはすぐに地下へ逃げてしまいます。このプロジェクトでは、地下深くに「止水壁」と呼ばれる巨大なコンクリートの壁を築き、地層の中に水を閉じ込める構造を採用しました。

かつて「干ばつとの闘い」だった島の農業を劇的に変え、島全体に安定した農業用水を届けるこの巨大なインフラは、自然の地形を巧みに利用した農業土木の結晶です。



### 地下ダム資料館



映えるソテツの向こうには、知的好奇心をくすぐる展示が満載。農業土木のプロの仕事を間近で感じてみよう！

### 宮古そば



これぞ宮古島！ボリューム満点のソーキ・テビチそば。地元の味を楽しみながら、島の暮らしを体感しよう。

世界が認めた『ミヤコブルー』の海が、あなたを待っています。  
学びも、遊びも、全力。宮古島で最高の思い出を！



## 農業土木技術一プロの仕事

農業土木に関連する企業・団体が日々の業務で取り組んでいる技術情報を紹介する「農業土木技術一プロの仕事」。今回は、用水系統調査のご紹介です。



用水系統調査と合わせて流量も計測している様子です。

### ◆ 用水系統調査とは？

農業土木コンサルタントの仕事は、きれいな図面を描くだけではありません。水がどこから来て、どこへ流れていくのか？用水系統調査では、迷路のように張り巡らされた水路の「家系図」を解き明かし、どの水源から田んぼや畑が水をもらっているのか（受益といいます）を調査します。これが明らかになっていないと、適切な設計ができなかったり、どれくらいの経済効果があるかなど、あらゆることに影響が及びます。

### ◆ ここが大変！だけれども大きなやりがい！

地図にない道、水に埋もれた蓋などなど、、、50年前の古い図面を手に、ヤブをかき分け、泥に埋まったマンホールを探し出すことも。現場はいつもスマートとは限りません。けれども、「図面では繋がっているはずなのに、水が流れない」そんな矛盾に直面したときこそ、五感を研ぎ澄ませて原因を突き止める粘り強さが求められます。

また、現地に赴くと地域の農家の方々から（時には）厳しいご意見を頂戴することもあります。しかし、その声こそが、本当に使いやすいインフラを作るためのヒントになると思います。もちろん、労いの声のほうがたくさんいただきますし、時にはちょっとした差し入れをいただけることも、、、あるかもしれません。



どこから水が来てどこに排水するのか、コツコツ記録します

正直、夏は暑いし、冬は寒いです。でも、現場で泥にまみれて見つけた『正解』は、デスクで計算しただけの数字より、ずっと多くの人を幸せにできる。そんな手応えを感じられるからこそ、私たちは現地で地道な仕事にも誇りをもって取り組んでいます。



## サークル活動紹介

### 「農業農村を応援する大学生サークル活動紹介」 静岡大学 棚田研究会

静岡大学 棚田研究会は、菊川市の千框の棚田を、地元の方々やオーナーさんと一緒に管理、保全するサークルです。

棚田研究会ではお米を作るだけではなく、他にも様々なイベントを行っています。

棚田での活動のメインであるお米作りは5月から始まります。棚田研究会のメンバーと地元の方々、オーナーさんとともにたくさんのお米を2日間にわたって植えていきます。おいしいお米が育つように楽しみながら作業を行います。



去年受けた野生動物の被害からお米を守るために柵を設置し、お米の収量増加に貢献しました。



棚田で見つけた生き物について、有識者から解説を聞ける「生き物教室」も開催されます。



定期的に草刈りを行うことでお米に送られる栄養を増やし、稲を強く大きく育てます。



冬には自分でそばを打ち、打ったそばがお昼ご飯になります。自分で作ったおそばはとてもおいしいです！



草刈りや電柵設置により昨年度よりも大幅な収穫量増加がみられました。



棚田の美しい景色を夜にキャンドルでライトアップする「あぜ道アート」暗い空間キャンドルの美しい光が棚田を幻想的な世界にします。

### 農業農村を応援する大学生サークル」の活動状況(Instagram)

☐日本グラウンドワーク協会公式Instagramにアップしています。  
<https://www.instagram.com/groundworkassociationjp/>

【発行・お問合せ先等】 一般財団法人日本グラウンドワーク協会 中里  
Tel:03-6459-0324 Mail:[nakazato@groundwork.or.jp](mailto:nakazato@groundwork.or.jp)

グラウンドワークとは「協働で地域をよりよくする」という意味です。当協会は、「中間支援団体」として①地域活性化、②環境保全、③福祉、④棚田保全等社会的課題解決を目的に、若者（大学生等）参加及び男女共同参画による協働を主軸にした、いわゆる「日本型グラウンドワーク」を推進しています。